

『哲学詩集』第三回

トンマーズ・カンパネツラ著

澤井繁男訳

23 叡智に カンツオーネ I

マドリガーレ 1

煌めきわたる第一位なる知、ほくの理性である

あなたは、世界探求の息吹を与えてくれる、

あたかも聖霊や宝石が力を発するかのようにすべての能力や望みがやってくる。

あなたはほくの詩をあなたの威信で創り変えほくの創作欲を大きく膨らましてくれる。

必然が力の感化にあるならば、愛からは調和が生まれ、知であるあなたは運命と秩序の親となる。

あなたは愛を支え、能天使を導き、そしてあらゆる天使の位階を定める、

あなたは、眞実を見極め創造するのである。

〈解題〉

これまで3を除いて、1から22までは「ソネット」だった。23から「カンツォーネ」が現われ、そのなかに「マドリガール」が含まれている。この三つの違いをごく簡単に記しておこう。

「ソネット」は十四行詩のこと。22までは、詩節の内容とは関係なく、みな十四行である。

「カンツォーネ」は、定型の複数の詩節から成っていて、叙情的な内容の詩。末尾にコンジエード (congedo) という、作者がその歌に託したい所感が、必ず読み込まれている。

23を例にとると、「あなた (叡智)」は、眞実を見極め創造するのである」が該当する。

「マドリガール」は、叙情短詩、あるいは短詩型の恋愛歌、牧歌で、音楽用語としては十六世紀に盛んとなった三声部以上からなる非宗教的合唱曲を指す。

1のマドリガールでカンパネッラの言いたいことは、万物には自分自身について秘なる認知があつて、そのおかげで、他者との区別が存在しているし、相手のことを、相手が自分にたいして抱いていると同じように愛憎の念で感受することが出来、それも自分自身の存在にとって益するか益しないかにしたがって行われる、ということである。

このような、生得で秘せられた知にこそ枢軸となる叡智が関わっており、ともに存続していき、やがて敷衍される色が褪せて完全に遊離して風化してしまう。つまり、叡智というものは、被造物の裡に深くあつて、自己の秘密となる根本的な意識を指す。

カンパネツラは、カンツォーネーの最初のマドリガーレで、永遠の叡智を謳って希求し、それを *Primo Sermo* 「原義は、第一番目の思慮分別。つまり「神慮・深慮」と命名している。プリモ・センノから諸実体の知が由来しているのはほかでもない、カンパネツラが『事物の感覚と魔術』で著わしたように、万物には多かれ少なかれ、感覚が備わっているし、感覚の保存がいかに充全になされているかを論述していたからである。

さらに、『形而上学』では、「力・知・愛」という三つの先験的な原理を設定して、この三つから、能力・知力・愛情が、第二の存在となつて表出される、とされている。

先験的な三原理を、カンパネツラ哲学ではプリマリタ *Primalia* と呼んでいて、プリマリタではそれぞれ、力から必然が、知から運命が、愛からは調和が誕生する。以上は〈大感化〉と言われている。

つねに〈大感化〉の一助を得て、求められるべき叡智に栄光が賦与され、叡智が愛の柱となる。叡智なくば愛のとりこになるからで、叡智は力も導く。叡智なくば事物の産出はなく、無化が生じるからである。

マドリガーレ 2

はじめから思慮の実体はあった、

神の御許に。力と愛が存在したように

神の子ご自身がそうであった。

この三体の真理が卓越した存在であるとはくは宣言する。

だから、部分と全体は存在と行為を可能にし、愛し、知るのである。

当然、歓びが生まれ、苦痛から解き放たれる。

憔悴しないためにも、敵を消耗させる、

周知のように、世界はプリマリタ〔愛、知、力〕で秩序が保たれている。

尊大なるひとびとよ、ほくとともに天に目を向け、

みずからの存在の価値の何たるかを測れ、

するとどこに己が属しているかわかるであろう。

〈解題〉

ここでは、「思慮」が永遠で、神でもあり、福音書が〈神の人性〉と呼んでいるものである。「能力」と「欲求」が神において恒久であり、一個の存在であるということ、つまり、『形而上学』を一見するところによれば、単一・複合にかかわらず、万物は三つのプリマリタをその一部としており、精神の優れた面を示している。次に、行動と情熱から、万物が感ずる共感と反感を表現している。感覚によって世界が際立つのである。火が上向きになるのは、空を友と感じているからで、大地にのがれるのは、火が大地を敵とみなしているからである。地上の事物は低きを行く。笑いには笑いたいし、笑顔を向けない者には近づかない。紀元前五世紀の哲学者アナクサゴラスが真理を述べているように、知性こそがカオスを他と識別する。事物が知性の力で感情を共有しなければ、万物はいずれかで留まることであろう。動きも行為も情熱も生成もなく、歓びも痛みもなくなるであろう。

マドリガーレ 3

宇宙と諸部分の創造主は

神であり、自然はほぼ娘にあたる、
われわれ人間の技は姪であつて、

自分が作れるものを創るのである、

さまざまな理念はねらいを定めている、

母親は祖父から会得し、一技から多技が生まれる。

しかしみずからが、本質や行為、あらゆる実体や他の事柄を通して、自己変革を感知し偶然なるものが創られる限り、ひとは感覚を磨いて愛を育んでいく。それだから、善悪を表に出す者は、憎しみもし熱望もする。自己を改新するこのようなひとは、みずからの何たるかを知っているのである。

〈解題〉

創造主である神は、御身の思念のなかであらゆる実体を見定めつつ、創造する。例えば自然は、事物のなかに入り込んである神技なので、神の娘というわけである。人間の技術は、本来付帯なものゆえ、人間から見た場合、神―自然―人間の技術となつて、祖父―母（娘）―技、の関係を形成する。こうして、自然界の全実体は己自身を知り、自己の知識と内なる秘められたものを愛し、自己変革が可能な限り、他の事物や感覚を愛す。アリストテレスやテレジオによれば、感覚するということは、情熱なのである。しかしアリストテレスは知識がすべてであることを欲しているが、テレジオは変革の多きを求めている。というのもテレジオはあらゆる事柄を三段論法を用いて導くからである。

マドリガール 4

それにしてもあらゆるものが死を迎えるわけではなく、燃え立つ材木のように、内部で変化するものもあろう。わずかな変質だが、類似する点があつてわかるのである。

それ以外のものは変容の量に多寡がある。

しかしすべてが存在し、共存しているのは神のみである。そういうことを知るには神は不変であつて、神の無限性が何よりも真理であり優れているからである。

あなたに発明の才あらば、あなたは物を創る。

ひとには力量が備わっている。けれどもなかでも神が最良の創り手なのである。

〈解題〉

感覚が全般的に変化するわけではないと言いつつ続けている。万物はやがて死を迎えるであろうが、わずかに変化を感じ知っているはずである。

仮に人間の技が自然にねらいを定めていても、人間に較べると、つねに自然の方が立案者である。しかし神は自然に先行する第一の技師である。つまり、すべてを知つていて教えてくれるが、人間には会得できないわけである。

マドリガール 5

植物は土で、魚は水で、動物は空気で、光の輝きは太陽に結びついている、

諸々の生命は、引きちぎられると、生命力に衰退を来たして嵩張るかさばだけである。

自己保存のためには神慮に誕生の時がつながっていないなければならない、

万有は多くの光を有するか光を欠くかである。

光を浴びていない万有のせいで、思慮は根絶やしとなり等閑なぞりにされ、死して信を喪う。

神の辞書に無駄という言葉はなく、多様な形を賦与することによって、可能態に還元し給う。あらゆる熱が太陽に、そして主に還つて往くように。

〈解題〉

すべての存在は太陽の輝きにも似て第一の実体と結合する。(この「第一の実体」とは彼の頌詩にも一連の叙述にも見られる用語で一貫した主義主張であるが、諸々の実体は、第一の実体でなく「第一の思慮」、つまり「神慮」と結合している。筆の運びが「思慮」から「実体」へと流れたのであろう)。万有にとつては生きるための感覚が同じく必要なのである。それゆえ、大なり小なり、光を享受しているのが万有である。しかし光によってその存在をいためつけられるものもあるものの、死に至るとき無に帰するのではなく、種々な形相をとつて、つねに存在へと還元される。存在せずには歩めない、ということである。熱が太陽に回帰するように相敵対する諸実体の知は神慮に帰する。いったい、「知はどこに源ありや」。

24 カンツォーネ II

マドリガーレ 1

太陽の光は飾り気なく真摯であり、みずから光源である、

というのも陽光を、素早く、生き生きと効果的に、そして寸時に拡散増幅させるからである。あらゆるものに光を注ぎ、そのものの表情を際立たせる。

片や、混濁した不透明な色では、濃淡や清明が失せ、みずから光は拡張しなくなる。

黄色、空色、赤に緑色と名づけられた色は、不届きな影のせいで、多かれ少なかれ

太陽光線を浴びられないが、かなりの日差しは目で見分けられるものである。

〈解題〉

まず「カンツォーネII」は、あらゆる思慮が、光から諸々の色彩が生じるがごとく神慮に由来することを謳っている。「マドリガーレ」もその例にもれず、太陽光線が神慮に似ていることを述べ、人間の目に入る最初の色で実体を浮き彫りにさせ、その対象の色調を映し出す。「……すべてのものは光にさらさらされて、明らかになります」(「エフェソス信徒への手紙」五章の13)。この見解はアリストテレス哲学への反駁である。アリストテレスは、色彩を視力の対象としており、色彩が光であると考えていないからである。さらにカンパネッタは光が人間よりも感覚力や視力の点で秀でているとしている。

マドリガール 2

こうして神の深慮は尽きることなく清純で包容力があり、世に二つとなくかつ機敏である。忽然と視界が^{ひら}展げ、形をまとい、示唆に富みかつ所有力がある。

御言葉を与えよう、それも天使の声音で。

また神は、暗黒の世界から有限の力を分け与えられて、恐怖に愛情、憎悪に忘却を人間に賦与された。そうなるともはや神でなく、自然、思慮、理性、空想と称される。

硬度の程度により硬直部が剥^はぎ取られるし、場合によっては純粹が保たれる。

そうしたことに人間は一向に無頓着であるが、神は人間の知識などものとも思われていない。

〈解題〉

恒久なる思慮の徳は光に似ている。被造物の思慮は色彩に類似していて、光線が関与している。愚鈍な人間の理解度は知れている。光の色彩のように、神の判断で人間は強靱にもなり、視野も広がり知識も会得して活動的になる。人間の精神は光であり色彩であって、神的分有であり、ないしは神ご自身でもあると論証可能であろう。

マドリガール 3

純一な精霊は光にも似て万有に存分に働きかける、そのようにしてあらゆる色彩はみずからの色で自己を顕わす。

精霊は色が表現するものから、存在していないものへと想いを孕ませることが出来る。

片や、不幸にして精霊が穢れている場合、

事物は、赤い眼鏡をかけると対象が赤く見えるように、

己固有の色を顕わすことが出来ない。

自然が嘘を暴き出す所のだが、もともと備わっている思慮分別は、

狡猾でも腐敗もしていず、罪深くもない。

〈解題〉

この詩で銘記しなくてはならないのは、精霊が光にたとえられていることである。その精霊にも、純粹なものと邪悪なものが二種類あることで、それを色彩による顕われで書き分けている。事物の固有性は一定しているが、見方によって変幻自在であることを示している。

マドリガーレ 4

神のように人間はあらゆる事柄を学び成し遂げるが、

神と違って、すべてを達成できず、事の本質にも至らない。

有徳の霊魂は生き生きと活動するのに知性を用いるであろう。

空間は歩数でわかる、暑さ寒さは度数で測る。

動きは効率的に、天候は刻々と変化する。

天使は光に乗って、からっぽのからだのまま、往ったり来たりして、面影も相貌もつきつきと変わる。
原子は天使が存在するように実体のなかにことごとく存在する。

〈解題〉

神と人間の能力の差異の比較の詩である。「原子」が読み込まれているが、カンパネツラはバドヴァ滞在中（一九二二年）デモクリトスの研究をしている。神の全能については、ディオニシオ・アレオバキタや聖トマスも主張している。傑出した洞察力で、神は群を抜いているのである。つまり、神に比肩され得る者なら、あらゆることを知っているだろう。書物に拠らなくても知っているのである。

マドリガーレ 5

たとえ極めつけに純粹で、さらに

万事を知悉しているひとでも、

確か、存在するもののなかにひとつだけ、その存在を認知出来ないものがある。

神は瞬時にあまたの技わざと知と眼識を、各人それぞれの持ち味を

活かしめられるように賦与された。

いつも己を見定め切れない人間は、裡うらなる我もわからない。

それゆえ節度を保って、我が裡うらに深く食い込んで、

不詳な存在に出会うだけであろう。

人間、星、天使、芸術作品はみな、

おのおのがさまざまな意味を帯びている。

〈解題〉

カンパネツラよれば、すべての実体にはそれぞれ細部にわたって、個別の客観的な存在の有り様があるという。詩で詠われている「その存在を認知出来ないもの」とは〈原子〉を指している。

25 カンツォーネ III

マドリガーレ 1

あまたの知恵が諸々の個体に宿れば

それだけ己や種の世界、それに時かけて生まれ来るものに充分保たれる、

神が整え、運命が定めたものも同じである。

花となり、果実となるものもあれば、母胎のなかで異形となるものもある。

人間はみずからの都合で草花の葉を食べるが、

葉にしてみれば迷惑この上ない話だろう。

人間にも髪の毛の豊かな者もいれば禿頭の者とくとうもいよう。

運命は、前髪は垂れて長いが、後ろ頭には毛が生えていない。
こいつが世界を統べているのである。

〈解題〉

万有に知恵があればあるほど、神はどれほどの期間、それが種や世界に役に立つか知悉している。運命はわれわれを超えることが出来ようが神を超越することは不可能である。「運命」の姿が描かれているが、これはこういうものとして往時から考えられてきている代表例である。

マドリガーレ 2

恒久なる知恵は驚くべきことを成し遂げた、

個体に気力がなくても、他者と組みして変化などしたがらず、

変容するよりも、死と対峙する。

しかし自己満足に陥り、己だけを信ずる。

他者のことを知らないのをよしとしているからである。

おお、神よ、

無知ゆえにそれぞれが幸福で愉悅に溺れ、世界は動いてゆく。

世界は混乱と喧騒の場であり、

ひよつとして狂気がなくなれば、みなさらに向上をめざして自裁さえしかねまい。

〈解題〉

後半部の、世界が混乱と喧騒の場であるのは人間が無知であるからだ、その無知なる狂気ゆえに向上があるとカ
ンパネツラは皮肉っぽく考えている。「有知」と「無知」の拮抗がひとつの課題となつている。卑賤なる存在は高貴
なる存在を知つていても、自己変革を遂げるために命を絶つ。材木が火にくべられ、燃やされるのを欲しているかの
ごとくである。それゆえ、「知恵」は必要なのである。

マドリガール 3

世界とその諸部分、さらに微小な部分とその一部の造作。

人間という実体と、天体についてあらゆる種の有するさまざまな変容。

儀式に品性、万物の生命それを宿す肉体。

過去に現在、星辰に惑星の石や花。

神殿、徳性、土地、そして夥しい形。

戦争、四大の因^{もと}、

無知を知っている者は知つたか振りをしない。

〈解題〉

ソクラテスも述べている言わずもがなの見解表明である。ルネサンス期では、『知ある無知』を書いたニコラウス・
クザーヌスが代表格である。

マドリガーレ 4

純一で祝福された魂だけ、知識がなくとも思慮のある者のところにやってくる。身に覚えのない罪や生まれる運命にない者を純粹には出来ない。

生来の才能は競争相手や学ぶ手立てに恵まれば磨き上げられるし、

みずからの魂も安んじられ澄んでゆくものだ。

けれども軽薄とは無縁で、賢くて英雄的であるならば、

おのおの思慮や力を受容れる必要もないし、

気力なく無知であるときも同じである。

それゆえ才能とは高貴なものなのである。

〈解題〉

みずからを無知であると知悉するひとは純粹で真の至福を受けられる。一方、他のひとから言われなくても、純粹さを信ずることは出来よう。獸的精神を純粹には出来ないが、神の靈気で知識は増すものである。技量がありライバルがいれば、知識は練磨されて具体化されよう。しかしアリストテレスの言葉（『形而上学』第五卷九章5）にもあるように、以上のものは生後身につけてゆくものである。みな思慮深く、良識ある法にしたがって生活しており、不純は許されない。叡智は我が物にしにくく世代を経て伝授はされにくい。知識人の子息が必ずしも優秀だとは限らないし、英雄の子供が勇ましいわけでもない。神からの賜物は叡智にあふれるひとにしか伝わらないものである。

マドリガーレ 5

そもそも生まれながらにして純粹な精神は世界の調和と織りなす糸で保たれている。

糸はほどけて天地に張り巡らされている。

純なる精神を生み出すものはいずれのものとも協和し合い、

榮譽を得て、神はその譽れを切望する。

おお、仕合わせな輩よ、そのような光榮に値する者のなかに潜む神は歛ばれるものである。

そうした完璧な状態にまとまるのなら屑くずな者でも幸福になれよう。

けれども、善というものは、心得違いや知識や清らかなものをあしらう者を忌避きひするであろう。

〈解題〉

カンパネッタが自作『太陽の都市』（邦訳名『太陽の都』）で述べているように、天地の調和からいかに純一な感性を持つ精神を生み出すか、また或る場所や星辰や時刻の下で完璧な生成を行なうのがどれほど困難なものか。神は、神ご自身が蒔かれた自然の理法を介して恩寵を採す榮譽に浴して、御手を差し伸べられ純粹な精神下で不滅なる魂をひとつにされる。

26 愛に眞実の愛を引き合わせること

眞に愛するには労力が要る、

愛の想像力と美しさは愛する魂を倍にする。

その他の功績など碎け散つてしまい、

痛みも和らいでしまふ。

女からの愛情がそれらを強め、

晴れがましさが歓びと威信をどれほど賦与するか。

愛ゆえに結ばれる。

閉じ込められていた魂の

永久とわの高貴が姿を現わすのだろうか。

魂は計り知れない希望となる。

愛すること、知ること、事をなすことは、

いつも驚くべき存在である神の掌のなかにある。

ところでぼくたちは崇高な気高さが負うはずの真実の真摯な愛の光も受けずに、

わが身にたいしては狐であり羊でもある。

〈解題〉

26と次の27はソネット（十四行詩）である。愛することによって力が倍になるのは本当であろう。女性を愛する対象としたときほど力が漲り、美の神みかみに深く刻印され、神と一心同体になるものである。恋をしているひとは永遠の美しさをまえにして敵すらいなくなるものである。しかし善には狐が潜み、狐の愛には羊がいるということも忘れては

ならない。

27 クレイト(エロス)
愛神に矢を

三千年前、すでに世界のひとびとは、えびら 腋を背負い翼をつけていた、異教の盲目の愛を崇めていた。異教のほかは悪とみなされた。

金の時代、

ひとは心がはだけ耳が聞こえなくなり、

慈愛に欠け、相手の話を訊こうともしない。

銀の時代、

ひとびとは大食らいになり果て魂は悲しみに沈みましたが、

純真で孝を尽くす幼子はもう裸ではない。けれども老いた者は狡猾である。

黄金の矢で彼らを射られないのは銃を手にしたからである。

鉛の時代、石炭・硫黄・熱風・雷鳴は悪魔にも似た創傷を肉体に負わせる。

ろうあ 聾啞と斜視でひとは貪欲になった。

だけどぼくが小さな鐘を響きわたらせると、

傷ついて耳も聞こえない盲目の獣は、

純一な魂を持つ賢明なるキリストの愛に屈服するのである。

〈解題〉

26に続いてソネットである。「盲目の愛」とは異教の愛を指しており、キリスト教の愛の訪れ以前の様相をカンパネッラは詠んでいる。表題の「愛神」の原語（ギリシア語）は *cupido*（クビド）で、これはローマ神話（ギリシア神話のエロスに該当）の愛の神であって、あくまで異教に属している。異教の愛神の消えた真の黄金時代の訪れをカンパネッラは預言している。「小さな鐘」とあるが、カンパネッラの普通名詞の意味は「小さな鐘」である。